

「学び返し」の体制づくり
～「おせっかい精神」の再発見～
(第4期答申)

平成23年3月
府中市生涯学習審議会

生涯学習審議会最終答申

はじめに

府中市が今後 10 年間の長期的な生涯学習の方向を示すために平成 21 年 4 月に策定した「第 2 次府中市生涯学習推進計画」(以下、「推進計画」という)では、これまでの「学ぶ」だけの生涯学習から、ひとりひとりの体験や学んできたことを生涯学習活動やさまざまな地域活動の中で生かす「学び返し」を提唱し、推進するとしている。

当審議会は平成 21 年 5 月の市教育長からの諮問「第 2 次“推進計画”の具体化に向けて」を受け、2 年間にわたって計画の具体化のための討議を行い、本最終答申を提出するに至った。その過程においては平成 22 年 3 月提出の中間答申の段階で、推進計画の基本目標に対する生涯学習の現状分析、課題の抽出および計画の具体化のための展開方法を考察しており、本答申は、その考察結果とその後の討議とを総合的に検討し、提言という形でとりまとめたものである。

府中市は古き伝統と新しい街づくりとが融合している。歴史の重みと昔ながらの特別な風物が色濃く残るこの街も年々都市化が進み、新たに住民が加わるにつれて市民意識も多様化し、人口構成や家族形態も急速に変化している。

これらのことを念頭に置きながら、生涯学習への関心の喚起と、「学び返し」を推進する環境づくりを主要なテーマとして検討した。

そこから推進計画を具現化し、今後参画する可能性が大いに期待される団塊の世代²の活動の機会をいかに設定するか、そして学校行事に絡ませて子ども達との接点を地域の中でどう作り出すか、およびスポーツなどを通して世代を超えた生涯学習をどのように実践するかなどについても考えた。

また本答申においては市の生涯学習推進の拠点となる生涯学習センター(以下「学習センター」という)の指定管理者制度³導入に向けた審議会の検討の結果も併せて収録した。

¹学び返し：市民が、今までの「学ぶ」側から、自ら学んだことや身につけた知識・技能など「学び」の成果を、地域や他の方に対し「返す」とする考え方。府中市生涯学習審議会で提言された造語。本計画のキーワードとなっている。

² 団塊の世代：1947 年(昭和 22)～49 年(同 24 年)に生まれた約 810 万人をさす。日本の出生数はこの 3 年間に毎年 270 万人前後を記録した。その前後の年よりも 2、3 割多く、非常に突出した人口ボリュームをもっている。

³ 指定管理者制度：平成 15 年に施行された制度で、地方公共団体やその外郭団体に限定していた公の施設の管理・運営を、株式会社をはじめとした営利企業・財団法人・NPO 法人・市民グループなど法人その他の団体に包括的に代行させることができる(行政処分であり委託ではない)。

【提言1】「学び返し」(生涯学習ファシリテーター・サポーターの育成)

学んだことや経験したことを互いに伝え合い、生かしあうことによって地域が活性化され、地域教育力が高まることを府中市の生涯学習の目標とする。「学び返し」の意味を広く捉え、遊びも含めた技能を持った人たちが、子どもたちを含め各世代の人に教え、伝えることとして推進したい。そのために、今後、生涯学習ファシリテーター⁴(以下ファシリテーターという)や生涯学習サポーター⁵(以下サポーターという)、各種ボランティア、いろいろな市民団体や学校教育を通じて、自分自身を含め「学び返し」を实践できる人やその可能性をもつ人の存在について学習センターが情報を集約し、ネットワークを編成して学習と交流の場を拡めることとする。

① 「学び返し」は子どもだけが対象ではなく、大人と大人との間でも必要である。地域の担い手となり世話役的役割も期待されるファシリテーターなどの育成を通じて、広い市民層の中から「学び返し」を实践できる人やその可能性を持つ人々の存在の情報を集約することをめざす。

② 現在の社会環境では、生涯学習への参加や実践活動の中心となっていく可能性が大きいのは、いわゆる団塊の世代やその上の年代層であり、これらの世代は潜在的需要も高く、しかも相当の効果も期待できると思われる。しかし現状と課題の分析から見えてくるのは、社会参加の半歩が踏み出せないため、地域をはじめとしたコミュニティ環境に融合できないといった事例であり、大事なことはそのきっかけづくりであるとの結論に至った。

これらを踏まえ、今後の展開目標として、次の各事項を考えたい。

- ・地域で活動するための案内や情報提供と地域リーダーの育成
- ・楽しみながら、将来の展望を開く生涯学習のすすめ
- ・発表会など、人から人へ、グループからグループへ拡がる交流のつながりと拡大
- ・祭りなどの楽しいイベントを通じた地域コミュニティの充実
- ・共同作業を通じた大人と大人の間でのコミュニケーションづくり

③ 学校行事や体験学習、放課後子ども教室などを実施する中で多くの学びの機会が生まれている。この学校教育の場を生かして「学び返し」の拡大を図り、生涯学習を推進する仕組みを作ることが大切である。

⁴ 生涯学習ファシリテーター：一般的には「促進する人」「手助けをする人」などの意があり、ワークショップなどにおける進行役や司会者を指すことが多いが、平成19年12月の東京都生涯学習審議会第一次答申において「地域の中で社会的なつながりを創出する推進者としての役割を果たす人、地域の担い手」を指しており、本計画でも、同様の意味で使用する。

⁵ 生涯学習サポーター：第2次府中市生涯学習推進計画の重点施策で、市内に住むさまざまな知識や能力、経験を持つ方を、「生涯学習サポーター」として紹介するだけでなく、学習活動についての相談や情報の提供についての相談を「生涯学習サポート」として受付け、さまざまな生涯学習相談に対し、広く対応する。

【提言2】居場所づくりの推進（現代の寺子屋）

ジュニア、ミドル、シニア各世代のニーズを念頭に置いた居場所づくりを進めるため、市が現状において有する施設と活動状況を洗い直し、より多くの参加が得られるような運営に配慮する。運営上の方針は次のように目的と対象をより明確にしたものとする。

- ・学習機会の提供と居場所づくりを一体として考える
- ・放課後子ども教室やスポーツの奨励などの青少年事業を促進する
- ・小地域や近隣などのコミュニティに密着した形の事業とする

- ① 「学び返し」を広めるには、学びの出会いをどういう場に設定するかが特に重要である。地域の大人は、子どもたちと一緒に学習することが望ましい。子どもには大きな可能性があり、小さい頃からいろいろな体験をしたり、豊かな体験を持った大人の苦労話を交えて楽しさを知ること、子どもたちは興味を持つものである。教える側の大人にとっても、これまでの経験が役立てば嬉しいであろう。
- ② 文化センターまつりなど、地域で行なう催しの中に子どもたちの出番やスタッフ的な役割を増やすことも考えたい。発表の場があることで、小中学生が自分たちの活動に対するやりがいや地域の中での居場所を見つけるきっかけにもなるであろう。
- ③ 遠出することが難しい高齢者には、居住地域内に集まれる居場所として、町内寺子屋⁶の設置を提唱したい。これは町内の自治会などによる自主管理、自主運営の場所であり、地区内の空き家などを活用するもので、高齢者がいつでも好きなときに集まれる小施設が望ましい。また学童保育や、各種塾などに行っていない子どもやその保護者もそこに行けば、世代間での自然発生的な交流が生まれ、「学び返し」活動となるのではないだろうか。まさに「現代の寺子屋」である。
- ④ 一般的に、講義を受講しても話を一方的に聞くだけになりがちであるが、その後の質問やディスカッションなどができる終了後の受講者交流なども有効な学習の手段である。例えば、セミナーや講座の受付についていえば、その行為自体が一つの「学び返し」であり、居場所でもある。そして、同じ場所に集まった仲間が受付にいるということが、受講者を勇気づける機会でもある。できるだけ、さまざまな活動へと関係ができるよう、次から次へと人をつなげることが大切である。
- ⑤ 伝統文化を次世代に伝承するため、地域における学習の場の情報収集・提供をすることとしたい。それらを体験できる様々な機会への積極的な支援も必要である。

⁶ 寺子屋：江戸時代、庶民の子弟に読書算や実務上の知識・技能を教育した民間教育施設。

【提言3】新しい学習活動支援(新しい学びの助け合い)

激しく変化する社会情勢や急速な情報化に対応するため、情報利用などのソフト面のテーマに重点を置いた学習活動を支援する。この支援体制を強化するファシリテーターを中心とする委員会を発足させる。リーダーの発掘を行ない、相互の交流を図る積極的な講座やイベントを導入する。

- ① さまざまな形で学習する機会を設けることが非常に重要であり、行政が場所を提供して、ファシリテーターとしての市民が、あるいは企業が講座などを開催するなど、学習情報の発信を積極的に行なうことが重要である。その一例として、学習センター、女性センターなどの講座内容をまとめて各文化センターに映像配信するなど、ICT⁷を活用した講座を充実させ発展していくシステムを作れないだろうか。いずれにしても、学習センターを中心とした連携を図ることが重要である。
- ② 参加したいという気持ちは持っているが、なかなか参加するまでには至らない人をどう後押しするかは重要な課題である。参加しつつ「学び返し」をしていくためには、どういうグループに参加するかということのみならず、講座後の交流の機会を提供するなどを通じて、受講者同士が接して知り合う機会を増やすことが大事である。

⁷ ICT：(Information and Communication Technology)：情報(information)や通信(communication)に関する技術の総称。日本では同様の言葉として IT (Information Technology：情報技術)の方が普及しているが、国際的には ICTの方が一般的に使用されている。

【提言4】 情報提供・相談体制（「世話やり」の復権）

自発的にボランティア活動や生涯学習を始めたい市民のために、従来の組織・方法に加え、ファシリテーター（地域の担い手）やサポーターが活躍できる仕組みを確立する。情報提供や相談を担当するファシリテーターやサポーターは、広報活動などを行い、存在や活用を市民に周知することが望ましい。

- ① 市民レベルではより多くの人が世話役的な、あるいは周りの人に関心を寄せるいわゆる “おせっかい” 的な相談相手となって相手の立場に向けて手を差し伸べる気風を育てていきたい。この試みはファシリテーター講座やサポーター講座での研修で着手されており、今後の一層の育成と拡充が望まれる。
- ② 自らの能力の活用や学習活動をしように思っても、未体験の人にとってはその場所・機会を探すのが現状では容易でない。例えば文化団体がいろいろな可能性を追求して組織の輪を広げていくように、学習センターが中心となって生涯学習支援を行う施設とリンクさせて、その場でできるような相談窓口の体制が必要である。ただし学習相談の窓口は毎日開いていないと機能しないので、例えば交通至便な府中駅の市政情報センターにサテライト⁸を置くなど、PRの方法を考えたい。

⁸ サテライト（satellite）：衛星を意味する英単語の音訳。「本体から離れて存在するもの」の比喩としてよく使われる。

【提言5】 推進体制(「拠点」と「連携」)

地域ぐるみの生涯学習推進体制をめざして、生涯学習にかかわる公共機関と地域のコミュニティ協議会を含む各団体は文化、スポーツなどの別なく横断的に交流して情報の共有に努めることとする。ファシリテーター、サポーターの講座修了者には必要に応じて一定の資格を付与し、地域における連絡機能を果たすことを支援する。

- ① 学習センターは、生涯学習ボランティアの活動が比較的充実しているが、生涯学習の拠点としては未だ十分とはいえない。更なる飛躍を遂げるために、ファシリテーターを含むより多くの市民の力を動員することで活性化を図りたい。そのためには情報源を拡げてイベントの企画・実施ができる人材育成をすることが望ましい。

今後は、市民の意見を聞くなど、よりニーズに合った企画が望まれる。まず全体としてなぜ施設の利用者が減ってきているのかを詳しく分析すべきである。利用傾向の分析後、民間の手法・活力を取り入れる指定管理者制度の導入についても、本書中に収録した「府中市生涯学習センターの指定管理者制度導入に向けて」のごとく、メリット・デメリットを積極的に検討する必要がある。その上で地域の人との出会いの場として、学習センターに「学び返し」の推進を集中させることが効果的であると思われる。

- ② 「学校教育プラン21」、そして「第2次府中市生涯学習推進計画」の課題である「学校・家庭・地域の連携」を中心として、両計画の整合性を図っていくことが肝要である。またその実現をめざすためにファシリテーター、サポーターの機能を充実させて地域のボランティア活動を促進し、あらゆる生涯学習の機会を展開することに努める。

おわりに

府中市で生まれ、育ち、あるいは地域との接触を重ねてきた私たちは一定のアイデンティティ（共通認識）を持つと言える。その一方で、人生のさまざまな段階で継続的に学習を経験しており、グローバル化⁹に象徴される活動の場の拡がりの中であって、それぞれ家庭や職場での役割を果たしてきた。

文化は時代とともに形を変えていくが、これはやはり各時代の人々の学習や体験が蓄積された結果である。これらの人々にとって地域は、日常生活で関わる場所であるとともに、人生のステージの後半生においては回帰する場ともなる。地域は文化の再生産の場として、あるいは振り返りの場としての機能をもっている。こうした地域活動は新たな視点を発見したり、共感する仲間との親睦や自己研鑽を行なう契機ともなり、新たな修養や趣味を発見する機会にもなる。

地域との関わりの中で欠かせない要素の一つが、周りの人々への関心と、そこから発する交流の機会が拡がることを喜びとする、意識の共有である。日本の社会はかつて周囲の人々に気を配り、互いに助け合って共感するいわゆる“おせっかい精神”がコミュニティを支える一面をもっていた。近隣関係が希薄になるに従ってこの気風はうすれているが、今一度「学び返し」「居場所づくり」「情報提供・相談体制」に共通する“ふれ合い、助け合い”の根底となる“おせっかい精神”を見直し、できればより尊重したいものである。

このような人間味あふれる文化の蓄積と再生産の過程で地域は、中枢的な基盤を提供するとともに、地域の人々が学び、教え、また積極的に「学び返し」場として更に後世に文化を伝える役割を果たさなければならないと思う。

以上

⁹グローバル化：政治・経済、文化など、様々な側面において、従来の国家・地域の垣根を越え、地球規模で資本や情報のやり取りが行われること。